「女性論」プロジェクト研究報告

A Report of the Women's Studies Project

女子高等学校のキャリア教育に関する研究

Research on Career Education of Girls High School

椙山女学園大学人間関係学部教授
吉田あけみ
Akemi Yoshida

椙山女学園大学現代マネジメント学部教授
東　珠実
Tamami Azuma

椙山女学園高等学校教諭
小川奈保子
Naoko Ogawa

椙山女学園大学人間関係学部准教授
小倉　祥子
Shoko Ogura

椙山女学園大学国際コミュニケーション学部教授
影山　穂波
Honami Kageyama

椙山女学園大学人間関係学部教授
藤原　直子
Naoko Fujiwara

1. 緒　言

中央教育審議会によるキャリア教育・職業教育の在り方に関する答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」[1]が示されてから、すでに6年が経過した。筆者らは、この間、女子大学におけるキャリア教育の在り方を検討するために、女子大学卒業生のライフコースの事例分析「女子大学卒業生のライフコースと女子大学の特性に関する研究―20代から80代の卒業生へのインタビュー調査を手掛かりに―」[2]を行い、その結果を教材「ロールモデル集　椙山発の女性たち」[3]にまとめ、さらにキャリア教育授業のための教材『SUGIYAMA私のキャリアマップMY CAREER MAP』[4]を作成し、女子学園におけるキャリア教育に関する研究「女子大学におけるキャリア教育の比較研究」[5]を行うなど、大学におけるキャリア教育を多角的に研究してきた。昨年、一昨年にかけては、本学の学部の学生たちを対象に「女子総合学園のキャリア教育に関する調査」[6][7]を実施し、学生のキャリアデザインに関する実態を把握し、キャリア教育の課題を抽出した。

これらの研究成果を踏まえ、本研究では、本学園高等学校の教員に対して、調査を実施し、高等学校のキャリア教育の実態と課題を明確にするとともに、昨年までの調査結果と合わせて、女子総合学園におけるキャリア教

育のあり方について検討した。なお、調査にあたっては国立教育政策研究所の「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」内の「高等学校・ホームルーム担任調査」[8]を参照した。

2. 研究方法

1）調査対象者

本研究では、本学園高等学校のうち担任を持つ教員30名を調査対象とした。調査票（有効回答票）の回収数は、27名、9割の回収率となった。

2）調査方法

本研究における調査はアンケートにより実施した。調査時期は、2016年7月である。調査票は、教頭先生からの趣旨説明ののちに配付し、7月中に回収した。

調査内容は、以下のとおりである。

①キャリア教育の推進が求められていることの認識について
②キャリア教育に関する資料や情報の収集状況について
③ホームルームあるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施の現状について
④ホームルームにおける進路指導の現状について
⑤ホームルームあるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施に関する生徒や保護者の現状について
⑥ホームルームのキャリア教育について困ったり悩んだりしていることについて
⑦ホームルームでキャリア教育を行う上で、どのようなことに重点をおいて指導しているかについて
⑧ホームルームでキャリア教育を行う上で、今後どのようなことが重要になると思うかについて

調査結果は、全体的傾向を把握するとともに、参考にした国立教育政策研究所の「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」内の「高等学校・ホームルーム担任調査」の結果と比較検討した。

3. 結果及び考察

調査結果は、以下の図1～8のとおりである。キャリア教育の推進が求められていることについての認識別の層と各質問項目の回答とでクロス集計を試みたが、いずれも統計的に有意な差は認められなかったので、単純集計結果のみについて考察する。

（1）キャリア教育の推進が求められていることの認識について

「知っていた」が48.1％と最も高く、次いで「何となく知っていた」が37.0％となっている。何らかの形で知っている人が8割を超えるが、一方で、「知らなかった」が11.1％、「無回答」が3.7％と1割以上認識していない人もいる。

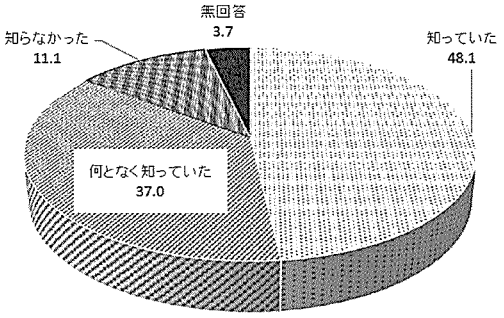

図1　キャリア教育の推進が求められていることの認識

15％弱にあたる４人は知らない、あるいは無回答であり、なお認識を深める必要があることを示してはいるものの、この結果からは多くの教員がキャリア教育の推進についての認識があると言うことができよう。

（２）キャリア教育に関する資料や情報の収集状況について

キャリア教育に関する資料や情報の中で、読んだことのあるものは、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（平成23年１月中央教育審議会答申）」と「上記以外のキャリア教育に関する専門図書、雑誌論文・記事等の情報や資料」がともに14.8％と最も高く、次いで「文部科学省・国立教育政策研究所のキャリア教育に関するウェブサイト」と「都道府県や市町村、教育センター等行政機関作成のキャリア教育に関するパンフレット、手引き及びウェブサイト」がともに、11.1％と続いている。

一方、「キャリア発達に関わる諸能力の育成に関する調査研究報告書（平成23年３月国立教育政策研究所）」、「パンフレット『キャリア教育は生徒に何ができるのだろう？』(平成22年２月国立教育政策研究所)」、「パンフレット『キャリア教育を創る』（平成23年11月国立教育政策研究所）」及び「パンフレット『キャリア教育をデザインする』（平成24年８月国立教育政策研究所）」はともに、0％であった。

なお、質問項目の中で最も高い割合だったのは、「上記のいずれも読んだことがない」

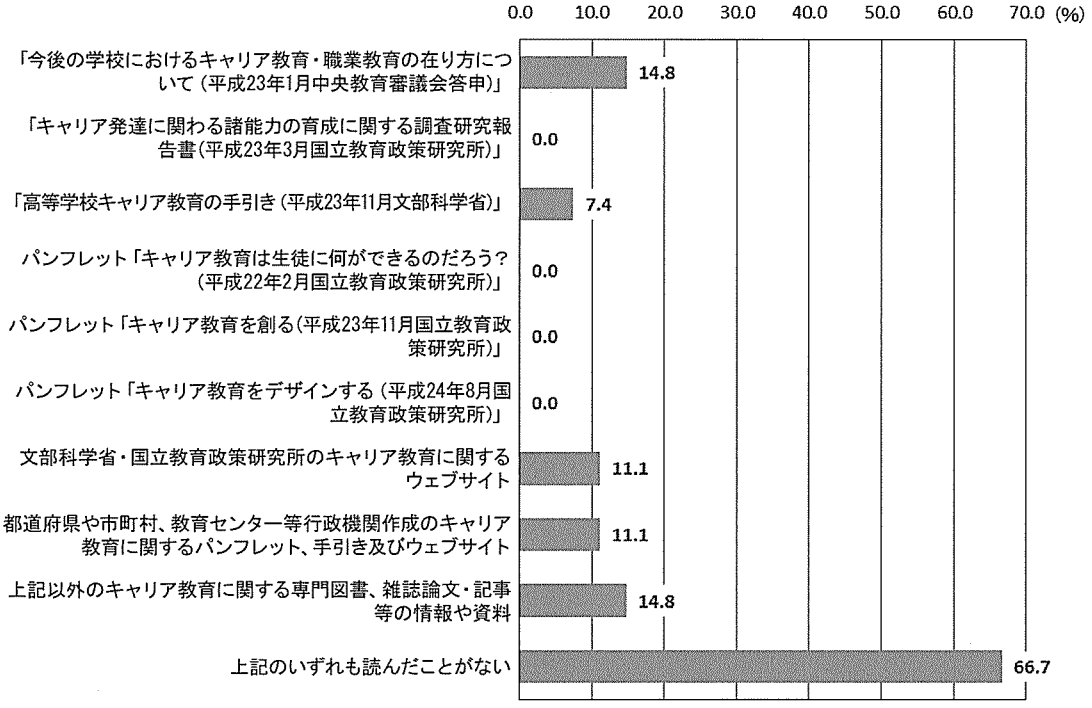

図２　キャリア教育に関する資料や情報の中で、読んだことがあるもの（複数回答）

で、66.7％と過半数であった。

キャリア教育の推進が求められているとの認識はかなり高いものの、キャリア教育に関する資料や情報の収集などの行動については、それほど積極的になされているわけではないという結果であった。

（3）ホームルームあるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施の現状について

「キャリア・カウンセリング（進路相談）を実施している」が59.3％と最も高く、次いで「ホームルームのキャリア教育は計画に基づいて実施している」51.9％、「ホームルームのキャリア教育の計画は、学校全体のキャ

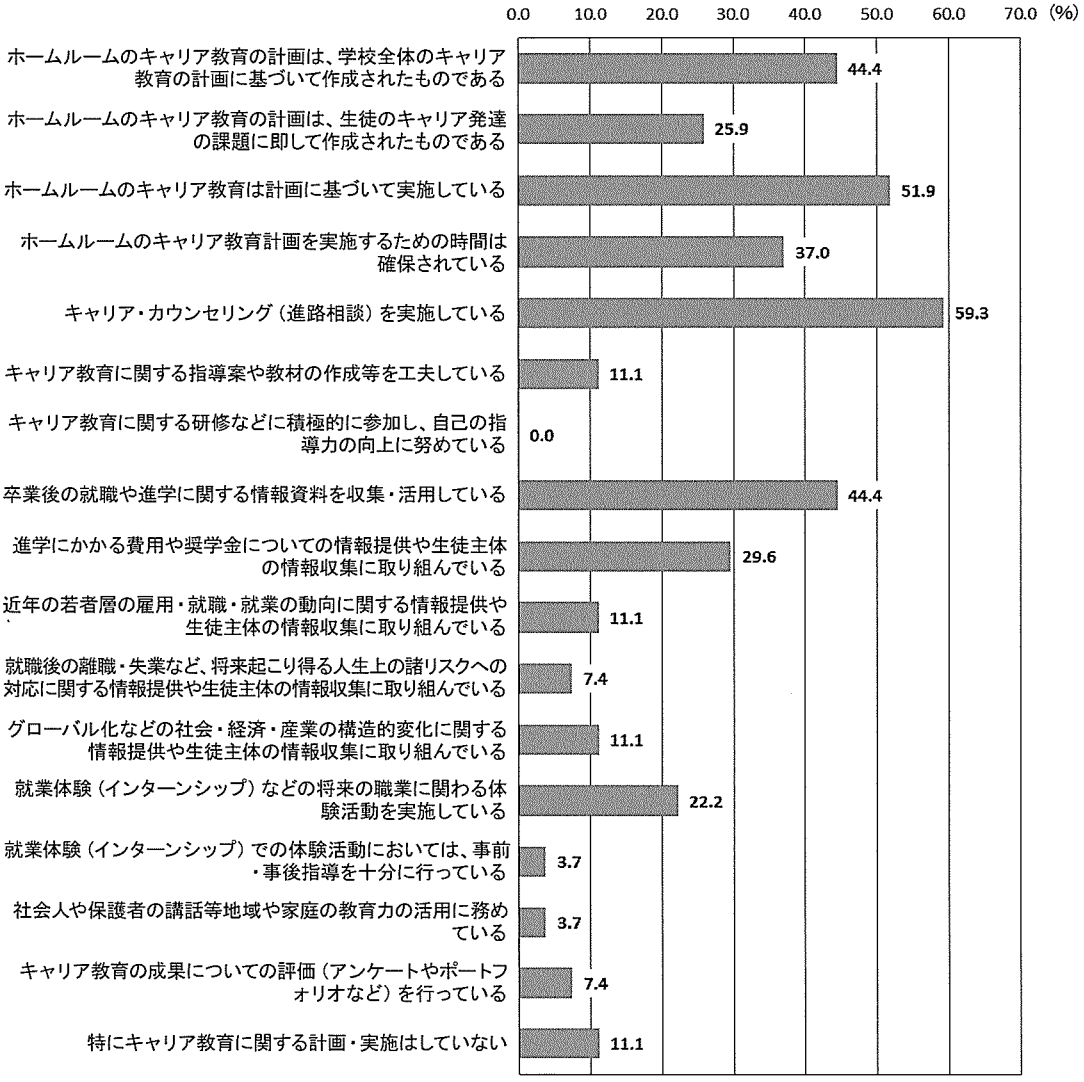

図3　ホームルームあるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施の現状（複数回答）

リア教育の計画に基づいて作成されたものである」44.4%、「卒業後の就職や進学に関する情報資料を収集・活用している」44.4%となっている。

一方、「就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる」7.4%、「キャリア教育の成果についての評価（アンケートやポートフォリオなど）を行っている」7.4%、「就業体験（インターンシップ）での体験活動においては、事前・事後指導を十分に行っている」3.7%、「社会人や保護者の講話など地域や家庭の教育力の活用に努めている」3.7%、「キャリア教育に関する研修等に積極的に参加し、自己の指導力の向上に努めている」0%は、大変低くなっている。

キャリア教育については、ある程度実施されているものの、従来の進路指導の域を出ていないのではないかと思われる結果であった。キャリア教育の推進が求められている現状にかんがみ、従来の進路指導にとどまることなく、人生キャリアを見据えたキャリア教育の推進が必要であろう。

（4）ホームルームにおける進路指導の現状について

「本人の希望進路先と本人の現在の成績状況を同程度に重視する」70.4%、「生徒本人の希望と、保護者の意見・希望を同程度に重視する」66.7%が高い。次いで、「保護者の意見・希望よりも、生徒本人の希望を重視する」37.0%、「生徒の仲間関係による進路希望への影響について把握する」25.9%であった。

一方、「本人の希望進路先よりも、本人の現在の成績状況を重視する」3.7%、「生徒本人の希望よりも、保護者の意見・希望を重視する」0%は低くなっている。

生徒本人の希望のみならず、生徒本人の成績状況は勿論であるが、その他にも保護者の意見・希望や生徒の仲間関係による進路希望など、多くの要素を勘案した上での進路指導がなされている現状が垣間見え、先生方の日ごろのご心労の状況がうかがえる結果であった。

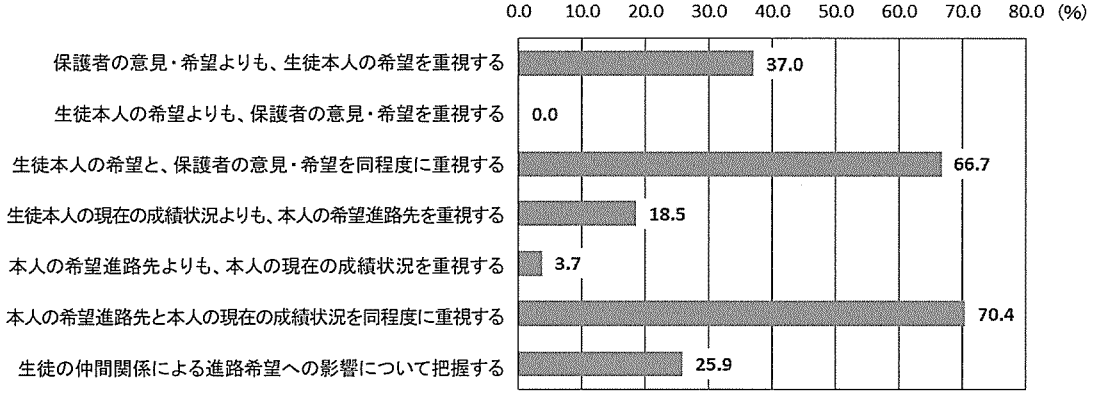

図4　ホームルームにおける進路指導の現状（複数回答）

（5）ホームルームあるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施に関する生徒や保護者の現状について

「キャリア教育を実施する中で、生徒は自己の生き方や進路を真剣に考えている」が48.1％と最も高く、次いで「生徒はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている」37.0％、「生徒はキャリア教育に関する学習に積極的に取り組んでいる」と「保護者は学校のキャリア教育の計画・実施について理解し、協力している」25.9％の順である。

一方、「生徒は卒業後の就職や進学に関する情報資料をよく利用している」18.5％、「生徒は卒業後の就職や進学に関する副読本などの教材をよく利用している」は3.7％と低くなっている。

生徒が、自らの将来について積極的に調査研究するなどの自発的な行動については課題が残るが、キャリア教育について考える場を与えられれば真剣に取り組んでいる。この姿勢を教員側が評価し、生徒のより豊かな人生キャリアを育むことが必要であろう。

（6）ホームルームのキャリア教育について、あなた自身が困ったり悩んだりしていることについて

「キャリア教育を実施する十分な時間が確保できない」が40.7％と一番多く、次いで「キャリア教育に関する指導の内容・方法をどのようにしたらよいかわからない」が33.3％で続いている。さらに「キャリア教育の適切な教材が得られない」25.9％、「キャリア・カウンセリング（進路指導）の内容・方法がわからない」と「キャリア教育に関する研修の機会が得られない」と「キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからない」がともに22.2％であった。キャリア教育に費やす時間の確保が難しいということと、教員自身が指導方法等について、研修を受ける機会もなく、どのように進めていいか悩んでいる様子がうかがえた。

「キャリア教育に関わる学習や体験活動について、保護者の理解や協力が得られない」や「キャリア教育を推進する予算が確保されない」、「キャリア・カウンセリング（進路指導）や進路に関する資料の保管・活用のため

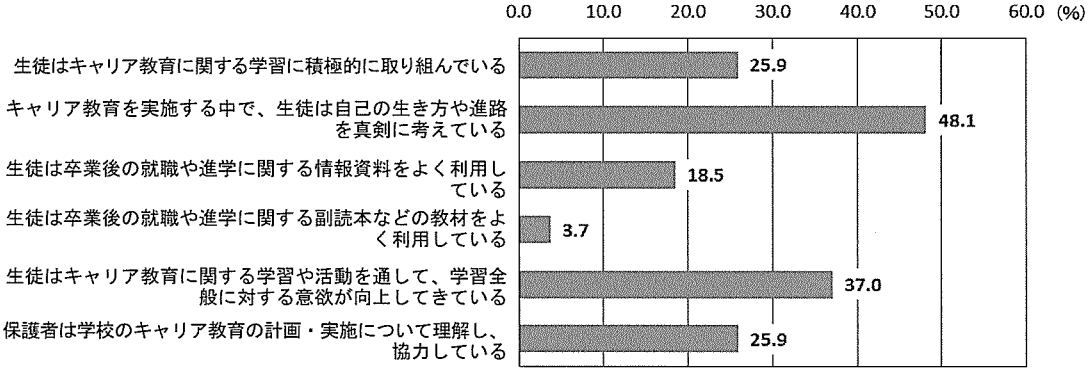

図5　ホームルームあるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施に関する生徒や保護者の現状（複数回答）

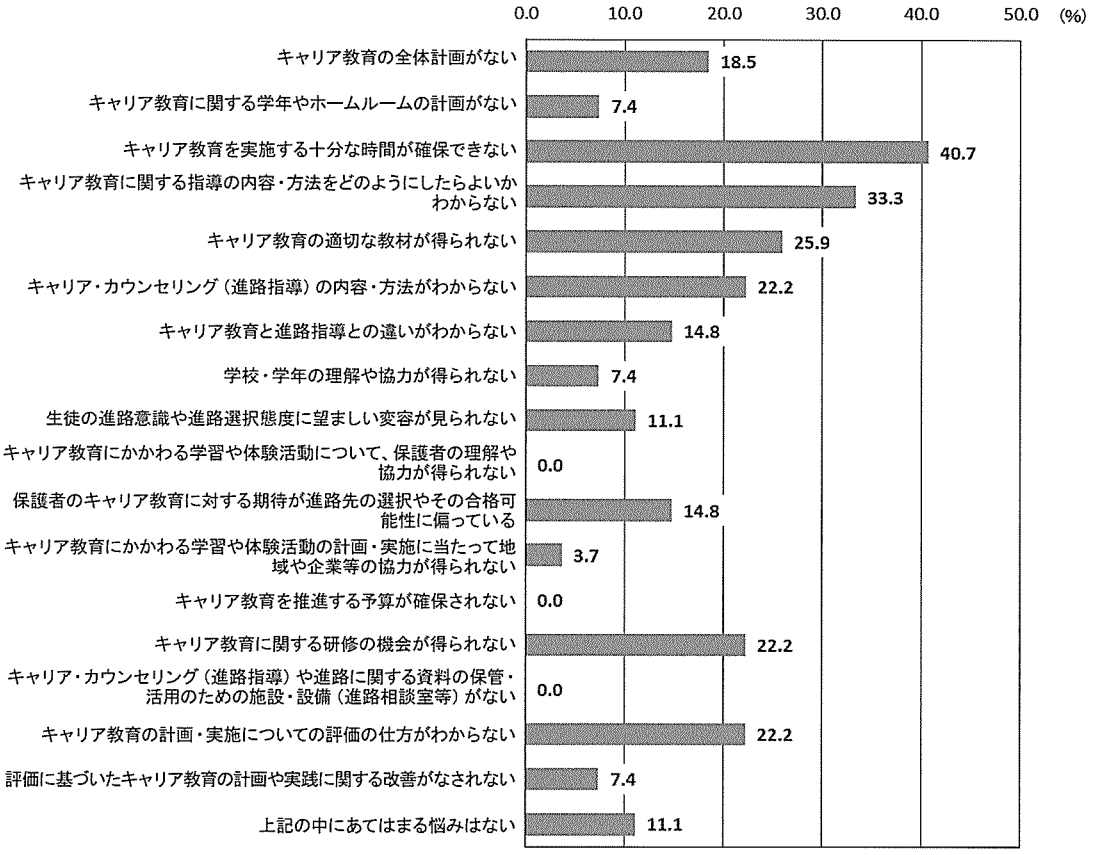

図6　ホームルームのキャリア教育について困ったり悩んだりしていること（複数回答）

の施設・設備（進路指導室等）がない」という回答はなかった。

キャリア教育に関する教員の悩みは、周りの人々や環境ではなく、キャリア教育に直接的に関わる情報や時間の不足ということであろう。

（7）ホームルームでキャリア教育を行う上で、どのようなことに重点をおいて指導しているかについて

すべての項目において、約9割が指導しているという回答を得た。その中でも「自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること」、「自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫改善したりすること」の2項目が96.3％と最も高く、さらに「よく指導している」の回答割合が高い項目は、「調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること」が51.9％、「自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること」が50.0％であった。

一方、「あまり指導していない」という回答項目は、「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫

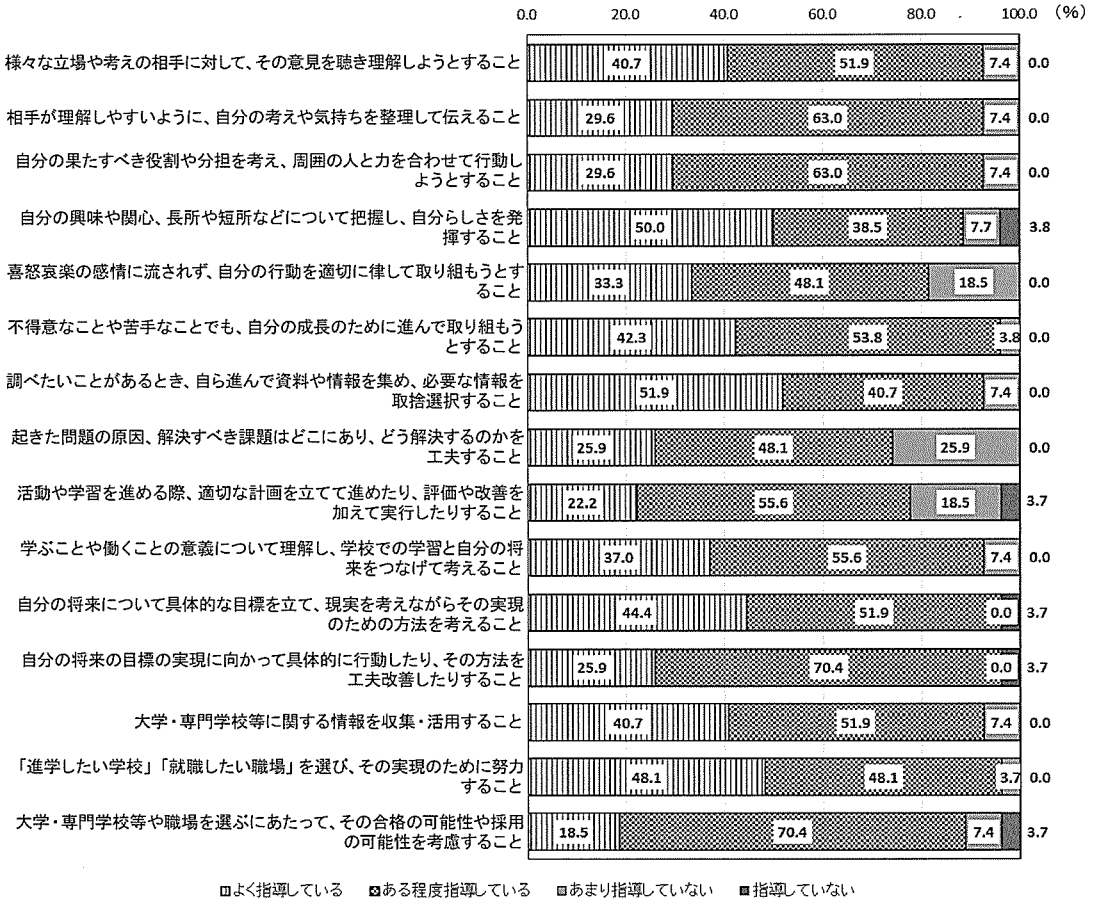

図7　ホームルームでキャリア教育を行う上での指導上の留意事項

注）選択肢「自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること」「不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組もうとすること」には無回答（n＝1）が欠損値である。

すること」25.9％、「活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること」18.5％、「喜怒哀楽の感情に流されず、自分の行動を適切に律して取り組もうとすること」18.5％であった。

ホームルームでのキャリア教育実践においては、自己理解を深めること、具体的目標を設定し必要な情報を集めること、その実現のために行動することや努力することを指導上の留意点として重視し、生徒の主体性を引き出すことを主眼としていることがうかがえる。

（8）ホームルームでキャリア教育を行う上で、今後どのようなことが重要になると思うかについて

ホームルームでキャリア教育を行う上で、今後重要になると思うことについては、いずれの項目についても、7割以上が「とても重要」または「ある程度重要」と考えており、課題を多面的にとらえていることがわかる。なかでも、「とても重要だと思う」が5割を

超える項目は、「学校のキャリア教育全体計画に基づくホームルーム・学年のキャリア教育の計画の立案」、「生徒のキャリア発達の課題に即したホームルーム・学年のキャリア教育の計画の立案」、「就業体験（インターンシップ）や社会人による講話など、キャリア教育にかかわる体験的な学習の充実」が59.3%、「キャリア教育を実施するための時間の確保」52.0%、「自らの生き方にかかわるキャリア教育の充実」と「キャリア・カウンセリング（進路相談）の充実」が51.9%であり、これらの6項目については、特に強く必要性を感じている教員が多いことがわかる。

一方、「とても重要だと思う」が3割を下回る、相対的に支持が低い項目は、「卒業後の就職や進学の指導に関する副読本などの活用」14.8%、「キャリア教育に関する指導案の作成や教材の工夫」22.2%、「キャリア教

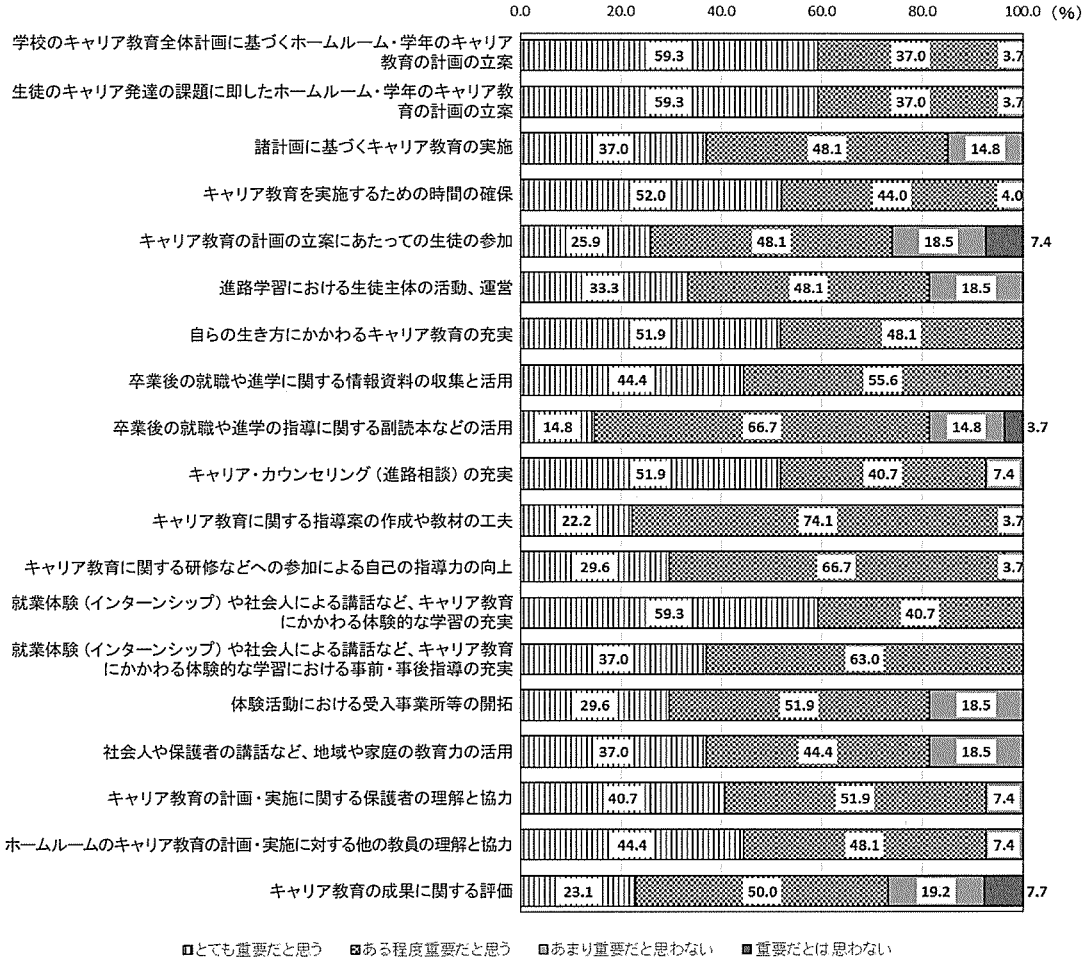

図8　キャリア教育を行っていく上で今後重要になると思うこと

注）選択肢「キャリア教育を実施するための時間の確保」で無回答（n＝2）が欠損値、「キャリア教育の成果に関する評価」で無回答（n＝1）が欠損値である。

育の成果に関する評価」23.1%、「キャリア教育の計画の立案にあたっての生徒の参加」25.9%である。特に「キャリア教育の成果に関する評価」、「キャリア教育の計画の立案にあたっての生徒の参加」については、全体の4分の1以上が「重要だとは思わない」または「あまり重要だとは思わない」と回答している。

このように、総じて、今後のホームルームでのキャリア教育については、学校全体の計画や生徒のキャリア発達の課題への配慮、体験的な学習、生き方にかかわる教育が重視され、時間の確保が望まれている一方で、副読本や教材等の活用や生徒の参画、成果の評価については、優先度が低いことが理解された。

4. 国立教育政策研究所の「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」内の「高等学校・ホームルーム担任調査」との比較検討

本調査の参考とした、国立教育政策研究所の「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」内の「高等学校・ホームルーム担任調査」の結果と比較検討してみる。対象・調査規模・調査時期が大きく異なるので、科学的な有意差を検討することは到底できないが、参考までに結果の比較をしてみたい。

(1) キャリア教育の推進が求められていることの認識について

国立教育政策研究所の調査と比較すると、「知っていた」が76.1%、「何となく知っていた」は21.3%で、「知らなかった」は2.6%となっており、本調査とは差がみられる。特に「知っていた」と言える人に30ポイント近くの差があり、本学園高等学校ではキャリア教育に関する認識が明確とはいいがたい結果である。「知らなかった」あるいは「無回答」に関しては、合わせて10%以上差がある。回答者の母数が27名と少ないため、回答に差が出ることは考えられるものの、本調査では認識が高いとは言えない。

(2)「キャリア教育に関する資料や情報の収集状況について

キャリア教育に関する資料や情報の収集などの行動については、「上記のいずれも読んだことがない」がどちらの調査でも一番多い回答であり、それほど積極的に情報収集がなされているわけではないということは同様であった。

「今後の学校におけるキャリア教育に関する教育・職業教育の在り方について（平成23年1月中央教育審議会答申）」、「上記以外のキャリア教育に関する専門図書、雑誌論文・記事等の情報や資料」、「文部科学省・国立教育政策研究所のキャリア教育に関するウェブサイト」及び「都道府県や市町村、教育センター等行政機関作成のキャリア教育に関するパンフレット、手引き及びウェブサイト」については、本調査の方が比率は低いものの、全体の中では割と高い方であるという回答傾向は似ていた。

一方、「キャリア発達に関わる諸能力の育成に関する調査研究報告書（平成23年3月国立教育政策研究所）」、「パンフレット『キャリア教育は生徒に何ができるのだろう？』(平成22年2月国立教育政策研究所)」、「パンフレット『キャリア教育を創る』（平成23年11

月国立教育政策研究所)」及び「パンフレット『キャリア教育をデザインする』(平成24年8月国立教育政策研究所)」についても、本調査の方が比率は低いものの、全体の中では割と低い方であるという回答傾向は似ていた。

「高等学校キャリア教育の手引き(平成23年11月文部科学省)」を読んだことがあるという回答は、国立教育政策研究所の「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」内の「高等学校・ホームルーム担任調査」では、20.5%だったものが、本調査では7.4%にとどまっており、これについては、本調査においてはやや低いと指摘することができよう。

(3) ホームルームあるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施の現状について

全体的に、本調査の方が回答比率は少ないものの、設問の一番目「ホームルームのキャリア教育の計画は、学校全体のキャリア教育の計画に基づいて作成されたものである。」から「就業体験(インターンシップ)などの将来の職業に関わる体験活動を実施している」までの回答傾向はよく似ている。

「就業体験(インターンシップ)での体験活動においては、事前・事後指導を十分に行っている」と「社会人や保護者の講話等地域や家庭の教育力の活用に努めている」が本調査の方が特に低く、「特にキャリア教育に関する計画・実施はしていない」の比率が本調査の方が比較的高い。

(4) ホームルームにおける進路指導の現状について

この調査項目は、本調査独自のものであるので、国立教育政策研究所の「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」内の「高等学校・ホームルーム担任調査」との比較はできない。

(5) ホームルームあるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施に関する保護者の現状について

文科省の報告書によると、「生徒は卒業後の就職や進学に関する情報資料をよく利用している」が最も高いが、今回の調査結果は「キャリア教育を実施する中で、生徒は自己の生き方や進路を真剣に考えている」が最も高い。一方、「生徒は卒業後の就職や進学に関する副読本などの教材をよく利用している」については、両方とも最も低い。

(6) ホームルームのキャリア教育について、あなた自身が困ったり悩んだりしていることについて

文科省の報告書によると、「キャリア教育を実施する十分な時間が確保できない」が34.6%と最も高く、次いで「キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからない」31.0%、「キャリア教育の適切な教材が得られない」26.1%、「キャリア教育と進路指導との違いがわからない」25.8%、「生徒の進路意識や進路選択態度に望ましい変容が見られない」24.2%、「キャリア教育に関する指導の内容・方法をどのようにしたらよいかわからない」23.1%と続いており、本調査と概ね同様の傾向ではあるが、本調査においては、「キャリア教育を実施する十分な時

間が確保できない」が、文科省調査よりやや回答率が高かった。

一方、文科省調査で回答率が低かった選択肢は「学習や体験活動について、保護者の理解や協力が得られない」3.9%、「学校・学年の理解や協力が得られない」3.5%、「キャリア教育に関わる学習や体験活動の計画・実施に当たって地域や企業等の協力が得られない」3.5%であり、周りの理解に関わるものであった。本調査においても「学習や体験活動について、保護者の理解や協力が得られない」は0%であったので、同様の結果であったと言えよう。

(7) ホームルームでキャリア教育を行う上で、どのようなことに重点をおいて指導しているかについて

文科省の報告書結果において「よく指導している」「ある程度指導している」と回答した傾向は、本調査においても同様であった。文科省の報告書では、「よく指導している」と回答した割合の高い項目は、「『進学したい学校』・『就職したい職場』を選び、その実現のために努力すること」が64.2%と最も高く、次いで「上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること」51.8%、「自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとすること」44.8%の順となっている。すなわち、「進路選択と実現のための努力」→「情報収集・活用力」→「協調性」の順である。

本調査においては、「調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること」51.9%、「自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること」50.0%、「『進学したい学校』・『就職したい職場』を選び、その実現のために努力すること」48.1%の順になっている。すなわち、「情報収集・取捨選択力」→「自己理解と個性の発揮」→「進路選択と実現のための努力」という順である。

一方、「よく指導している」の回答割合が低いものは、文科省の報告書においては「活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること」21.3%、「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること」16.5%が挙げられる。本調査においては、「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること」は22.2%、「大学や専門学校等を選ぶにあたって、その合格の可能性や採用の可能性を考慮すること」18.5%が挙げられる。この項目については、文科省の報告書結果において41.2%を示しており、本調査と結果の違いが見て取れる。

(8) ホームルームでキャリア教育を行う上で、今後どのようなことが重要になると思うかについて

文科省の報告書と比較すると、概ね、本調査で「とても重要だと思う」が高い値を示した項目は、文科省の調査結果でも値が高く、本調査で「とても重要だと思う」が低い値を示した項目は、文科省の調査結果でも値が低いという状況である。

そのようななかで、「とても重要だと思う」の回答率に10ポイント以上の差がみられる項目に注目すると、本調査の方が文科省調査よりも値が高いのは、「自らの生き方にかか

わるキャリア教育の充実」、「就業体験（インターンシップ）や社会人による講話など、キャリア教育にかかわる体験的な学習の充実」であり、逆に本調査の方が文科省調査よりも値が低いのは、「卒業後の就職や進学に関する情報資料の収集と活用」である。これらの結果より、本学園高等学校では、生き方全体に関するキャリア教育が重視されていること、また、現在不足している体験的なキャリア教育を充実させようとしていることが推察される。また、卒業後の進路に関する資料の収集・活用については、大学の併設校という特性から、重要度が相対的に低くなっているものと思われる。

5. 結　語

本学園の高校の教員に、キャリア教育の必要性は理解されてはいるものの、時間的な制約や情報不足などによって、十分にキャリア教育がなされているとは言えない状況であった。積極的に、キャリア教育に関する資料や情報の収集にあたるということもあまりしていなかった。また、何等かのキャリア教育を行っている場合でも、いわゆる従来型の進路指導にとどまっている傾向にあった。進路指導については、生徒本人の希望のみならず、本人の成績状況、保護者の意見・希望、生徒の仲間関係による進路指導など、多くの要素を踏まえての指導がされていた。今後は、それらに加えて、人生キャリアを見据えたキャリア教育の推進が必要であろう。生徒は、それほど自発的には、自分の将来に向けての取り組みをしているわけではないが、キャリア教育の場においては、真剣に取り組んでいたので、教員側からの働きかけ次第では、生徒のキャリアについての意識を高めていくことは可能だと思われる。現在においても、教員は生徒の主体性を引き出すことに主眼を置いてキャリア教育実践に取り組んでいたが、さらに生徒たちの主体的な学びを引き出す工夫が必要とされていると言えよう。そのためにも、キャリア教育にかける生徒・教師双方の時間の確保が望まれる。

文科省調査と本調査の結果は、概ね同様の傾向を示していたが、キャリア教育の推進が求められていることの認識、キャリア教育に関する資料や情報の収集状況、キャリア教育の計画・実施の現状や、キャリア教育を実施する十分な時間が確保できないといった項目で、本調査の方がやや思わしくない傾向にあった。しかしながら、本調査の実態においては、やや従来型の進路指導中心のキャリア教育に偏っている傾向にあったものの、今後どのようなことが重要になると思うかという問いに対しては、生き方全体に関するキャリア教育の重要性や現在不足している体験的なキャリア教育の充実の必要性などが文科省調査と比べてより高く指摘されていた。

これらのことから、キャリア教育の重要性は十分に認識されているものの、現実には生徒の学習時間、教員の準備時間など時間の確保という課題があることがわかった。今後は、高大で連携することにより、大学の持っている情報・人的資源などを積極的に提供し、それらを活用することにより、時間の制約をカバーし、より密度の濃いキャリア教育の可能性をともに模索していきたい。

引用文献・参考文献

1）中央教育審議会「今後の学校におけるキャ

リア教育・職業教育の在り方について（答申）」（2011年1月31日）。
2）東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・藤原直子・吉田あけみ「女子大学卒業生のライフコースと女子大学の特性に関する研究—20代から80代の卒業生へのインタビュー調査を手掛かりに—」、『椙山人間学研究』第7号（2012）、pp. 110～136。
3）椙山女学園大学女性論プロジェクト「ロールモデル集　椙山発の女性たち」(2013)。
4）東珠実・太田ふみ子・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・塚田文子・藤原直子・吉田あけみ『SUGIYAMA私のキャリアマップMY CAREER MAP』椙山人間学研究センター（2011）。
5）東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・藤原直子・吉田あけみ「女子大学におけるキャリア教育の比較研究」、『椙山人間学研究』第9号（2014）、pp. 164～180。
6）東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・藤原直子・吉田あけみ「女子大生のキャリアデザインと女子大学のキャリア教育に関する研究、『椙山人間学研究』第10号（2015）、pp. 141～163。
7）東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・藤原直子・吉田あけみ「女子大生のキャリアデザインと女子大学のキャリア教育に関する研究—専門職養成学部を中心に—」『椙山人間学研究』第11号（2016）、pp. 134～155。
8）国立教育政策研究所・生徒指導進路指導研究センター「高等学校・ホームルーム担任調査」『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書』(2013)、pp. 249～267。